
消え逝く者へ

咲亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消え逝く者へ

【コード】

N9557M

【作者名】

咲亜

【あらすじ】

ある夢を見たその日から、自分に異変を感じる銀時。そしてその異変は平和な日常を壊してしまい……。
白夜叉の罪は消えるのだろうか？
償いと贖罪の物語。

序章 伝えたい事

居ナイ。

皆々、消えていった。

独りでいい。

もう、家族など、仲間など望まない。

・・・望めない。

罪が消えるまで。

だから、

サヨナラ。

たとえば、人殺しの罪が消えたとして、

俺の心は癒されるのだろうか？

たとえば、アイツらを殺してしまった、

俺の罪は消えるのだろうか？

たとえば、俺が消えてしまったら、

皆々幸せになるのだろうか？

だったら、俺は喜んでこの身を、滅ぼしてしまって構わない。

だからまた会える日まで、

・・・もしかしたら、堕ちるのは地獄だろうから、また生まれ変わってからね。

じゃあ。

第一章 悪夢

人が、独り。

鬼が、一人。

人を斬って、人を殺して。

人が死んで、人が消えて。

血が舞って、赤、紅、朱。目の前が真っ赤。

白装束に赤を滲ませ、剣をただ振るう自分の姿。

その中に、あの人が。

待て、動くな。振るうな、殺すな。

脳裏の叫びも虚しく、俺の刀が、あの、人を。

いつか見た紅が舞って、奇麗に光って。

光って。舞……って……。

ガバァッ。

「はあっ……、はあ……。」

悪夢。大切な人をこの手で殺すという、一番最悪な悪夢。

修羅と化した俺の心が、あの、せ・・・んせいを・・・。

「心気くせえな、つたく・・・」

髪を掻きむしって、俯きながら囁くように呟く。

時計は、6時を指し、2月の空は、まだ薄暗く、太陽の光が疎らに輝いている。

「夢だ夢」

自分に言い聞かせるように、低く言う。

「あれは夢・・・」

「銀ちゃん、どうしたアルカ？」

襖を開いて、かわいらしい顔が覗く。

赤い髪を揺らして、自分に近付く。

赤い髪が、さっきの夢を思い起こさせる。

揺ら揺ら、揺れる紅。

「ぎーんちゃん！どーしたネ、ガキみたいな顔して。怖い夢でも見たアルカ？もー、子供アルナー」

神楽の言葉で、走馬灯のように蘇る光景。

白装束の俺に……、真っ赤な血の色。

曇天の雨の中、ただただ空を見上げて、変わらない真実に絶望していた。

あの、夢。

「銀ちゃ……………」

「あ……………」

ドンッ、と神楽を突き飛ばす。

分からない。ただ、俺の体が、脳からの指示を待たずに、勝手に……。

「銀ちゃ……………」

「っ!?!」

パシンッ!

そろそろと伸ばしてきた神楽の手を、勢いよく叩く。

白い手が、一瞬の後に赤く腫れ上がった。

「……………」

「銀ちゃん……………。変ヨ。銀ちゃん、今日変!」

うつすらと涙を浮かべて、俺に向かって叫ぶ。

「魔れてたし、ねえ銀ちゃん、嫌な夢見たんでしょ？私達に相談してヨ。ね？」

「・・・お前らに、分かるか？」

低く、やっと聞きとれる声で言う。

目の前で神楽が息を呑んだが、知ったこっちゃない。

「目の前で人が死んで、自分の手で人を殺して、何度も、何度も、それを思い起こさなくちゃいけねえ俺の気持ち分かるか！？」

びいん、と部屋の中に響いた声で、我に帰る。

涙目でこちらを見つめる神楽。そしておもむろに口を開く。

「分かんないヨ。私だって。でも、今は違うでしょ？！だって、銀ちゃんは私達を護ってくれる、とっても優しい人ネ。過去は過去だけど、銀ちゃんは今を大事にしなくちゃいけないネ。そう思えば、銀ちゃんも変な夢、見ないようになるアルヨ」

その言葉が、ゆっくりと俺の心に沈んだ。

少し考えた後、ぼそりと呟いた。

「・・・ありがとう」

今はこの笑顔を護りたい。

今はこの平和を楽しみたい。

今は、
今だけは。

第二章 日々

現在、6時半。眠ろうにも眠れない時刻であり、というかも目が冴えたので、新八が来る前に朝飯を作ってしまったおうと、台所に立つ。

横で神楽が爛々と目を輝かせている。ちよつとうつとおしい。

「銀ちゃん！！私オムレツがいいネ！！野菜無しの！！」

「朝からオムレツ？！後野菜無しとか、体に悪イだろーが」

「じゃ、じゃあー！！カルボナーラ！！」

「それは昼作つてやんよ。他ねーのか」

「じゃあ卵焼き！チーズ入りのが食べたいヨ！！」

「・・・砂糖じゃダメ？」

「ダメメ！」

ぷう、と頬を膨らませる神楽に、ため息を返しながら、冷蔵庫の中にあるチーズを取り出す。

「わあ！銀ちゃん優しいネ！！それに免じてオムレツも私におくれ」

「っざけんな。俺は砂糖入り食う。オムレツは夜な」

笑顔と共に、バンザイしながら飛び回る神楽を脇目に追いやつて、フライパンを握る。

・・・そう。この笑顔があれば、俺は生きていける。

新八も早く来ねえかな。

三人で一緒に、朝飯食って、買い物に行こう。

「銀さん！・・・あれ、朝ご飯作ってるんですか？」

「そうヨ。チーズ入りの卵焼き作ってるアル」

「オメー何もしてねーだろ。あ、そうそう、後何食いてー？」

俺が言うと、新八は手ぬぐいからタッパーを取り出して、ずいとおちに差し出す。

「漬物です。家に漬けてあったのを持ってきました」

「・・・それ、姐御が漬けたアルカ？」

「・・・死にたくねー、まだ」

「僕が漬けました・・・。心配いりません」

呆れ顔で俺と神楽を見据えてから、ふっ、と笑って俺の手元をみる。

瞬間、驚愕で目が見開かれる。

「あああああああ！！！！銀さん！卵焼き焦げてますううう！！！！」

「わっ！！やべえ！何かモクモクいつてる！！！！しし新八い、何とかしろオオ！！！！」

「無理です！作り直してください！！！！」

「私の卵焼き！！私の卵焼きがあああ！！！！銀ちゃんどーしてくれるアルカ！！！！」

ぎゃーぎゃー、しっちゃんかめっちゃんか。

でも、この喧騒が、平和の印。

・・・何か、あの夢を見てから、鬱な事ばかりを考えている。

頬を両手でびしびし叩いて、気分を覚醒させる。

俺は、笑顔の消えない日々を望むだけ。

ただ、それだけ。

「へいへい、わーっただよ。作り直せばいいんだろ？」

「わーい！！次失敗したら、殴るヨ」

「ひでえ、神楽・・・」

「僕個人としては、肉も欲しいですね」

人差し指を突き出して提案をする新八に、テンションも高く賛同したのは神楽。

「銀ちゃん！私も私も！！」

「オメー、テンションたけえな。脳の血管切れんぞ」

「銀さんがテンション低いだけでしょ？低血圧なのに早起きして・・・」

「いつもは早く起きるとかうるせーだろ！！ったく」

「何がつたくだこの天パ！それはお前が昼まで寝るとか戯言ほざくからだろ！！」

た、戯言・・・。新八は意外に毒舌だという事が分かった。

朝飯も無事食べ終わり、俺の脳内で予定していた買い物に行く事にした。

そうだな、酢昆布と、新八には寺門通のCDでも買ってやるか。

これはまだ断罪の余興・・・。

第二章 日々（後書き）

あとがき

一日で書きました。

出来悪いかも・・・。

温かい目で見守ってください！

次回予告

買い物の中で、真選組と遭遇する万事屋三人。
その真選組から、あの春雨が・・・。

後は次回をお楽しみに！！

運と時間があれば明日投稿します。

第三章 春雨

いつもより早い朝飯の後、三人そろって買い物に出る。

基本的に、買い物は新八一人で行くので、そろってテンションは高い。

・・・いや、俺以外。

「銀ちゃん銀ちゃん！私酢昆布食べたいネ！」

「今日は奮発しますか。銀さん、イチゴ牛乳買いますから」

「新八イ、寺門通のCD欲しくねえか？」

「欲しいですけど、もう買っちゃいました」

「・・・・・・・・」

気遣い台なし。テンションもがた落ち。

負のオーラで睨みつける俺に気付いたのか、慌てて言い繕う新八。

「あっ、じゃあ、寒いし肉まんでも食べたいですっ」

「おーっ！私も私も！」

「オメー、酢昆布だろーが。じゃ、俺はあんまんで」

「銀さんはイチゴ牛乳買うでしょうが」

「じゃあ新八の肉まんの金を、俺のあんまんに使おう」

「銀さん、僕の人権は？」

笑顔で無視すると、「まあとにかく、」と切り出す。

「とっとと買い物済ませよーぜ。めんどいし」

「銀さん、イチゴ牛乳、１リットルじゃなくて500ミリリットルで」

「何故半分?!俺何もしてねーだろ!?!」

「銀ちゃんいーのかなー?新八はパフェ食べさせてあげるらしーヨ?ツンデレって困ったちゃんアルネー」

「パフェ食わせねえしツンデレでもねえよ!?!いいからさっさと買物行きますよ!?!」

そう告げて、ずんずん歩いていく新八。

一旦、神楽と顔を見合わせ、慌てて後を追った。

本屋、スーパー、その他多数をまわり、俺はあんまん、新八と神楽は肉まんを片手に意気揚々と歩いている。

目当ての物もあらかた買い、家路についたその時だった。

「あれ、旦那ア。三人揃ってお出かけですかイ」

気の抜けた声。この声は、真選組一番隊隊長、沖田総悟だ。

「なんだ、沖田くんか」

「それ以外に誰がいるんですかイ、旦那」

「や、いねーけど」

「分かってんじゃないですかイ。あ、そうそう、面白い話を聞きやした」

と言いながらも、顔は相変わらず無表情であり、訝りながらも話を聞く事にした。

「あの宇宙海賊の春雨っているじゃないですか。あれが白夜叉、っ

て奴の命を狙ってるとかいないとか」

隣で、神楽と新八が息を呑む。

不安そうにこちらを見つめる二人に、「平常心」と小さく呟いて、
沖田くんに向き直る。

「ふうん。なかなか興味深いじゃねーか。そんで？」

「ま、あくまで噂ですけどねィ。新八君、チャイナ、何か知ってん
かィ」

「し、知りません！」

「私、宇宙には興味ナッシングネ！」

焦ったのか口調が些か早い。

取り仕切るように、頭をコンコン叩いてみる。

「ま、とにかく、その春雨って輩が江戸に舞い降りて暴れ回らなき
やいい話でさア。では、俺はこれで」

沖田くんが去った後、二人の頭をぺしりとひっぱたき、苦笑しながら
言う。

「ばあか。あんなんじゃバレるに決まってるんだろ」

「え、そんなに変でした？」

「バレてねーヨ。アイツ鈍感アルからな」

そして三人で笑い合う。

こんな光景が、いつまでも続きますように……。

一方、その頃。

「お、これうまさー！。おばちゃん、この団子、領収書は土方宛で二十串」

微塵も疑わなかった沖田であった。

第三章 春雨（後書き）

真選組、沖田さんだけでましたねー・・・。

また出します！土方さんも色々！

オリキャラが一人二人ですが、いつかは分からないので、御了承ください。

次回予告

鬼兵隊、高杉晋助と見知らぬ少女の元に、不可解な知らせが届く。

その内容は・・・？

・・・オリキャラ次回でした。すみません。

第四章 事実

ピリリリリリ・・・。

鬼兵隊の船の中、響いたケータイの着信音。

「はい、もしもし」

電話に出たのは、来島また子。

そして耳に届くのは若い女の声。

「あら、また子ちゃん。私よ私。分かる？」

「分かるって・・・。あつ、美代さんツスか？」

「あーそうそう。ねえ、隊長いる？」

視線を巡らせて、目的の人物を捜す。

遙か彼方に、その姿が見え、美代に告げる。

「いるツスけど・・・」

「これ、スピーカーにして、隊長に近付きなさい」

命令通り、そろそろと近付く。

くると、首だけで振り返るのは、美代が隊長と呼ぶ、高杉晋助だ。

「よオ、来島。コソコソと俺に何の用だ？」

「み、美代さん、どうすればいいツスカ・・・？」

そして直後、

「隊長おおお！！大変大変大変だつてばああああ！！！」

「来島、今すぐ切れ」

高杉の言葉に、ガクガク頷いて、ぶちつと電話を切った。

そして何故か、電話の相手が、後ろのドアを開けて出て来る。

「隊長酷い！何で私の電話切るのー?!」

「・・・何が大変なんだ？」

さらりと無視して、低く呟く。

「あつ、」と声をあげて、美代は一枚の紙を取り出す。

「何だア、これは？」

「さあ。まあよく分かりませんが、白夜叉の暗殺計画がどうのこうの」

「分かってんじゃねーか」

「いえ内容がですね・・・。意味不明で」

頭を掻きながら笑ってる美代に、いらついた視線を投げながら、紙を読み進める。

「晋助、ここにおつたでござるか」

「・・・万斎か」

「面白い話を聞いた。実はだな・・・」

万齋の話に注意深く聞いていた高杉と美代は、やがて目に驚きの色を見せる。

「ふうん、白夜叉か……。うんっ、気に入った！！それ、私に任せなさいっ！！」

「足引つ張るから引つ込んでろ」

「じゃ、独断行動でいくわよっ！！隊長の意地悪！！」

そつぽを向く美代を無視して、万齋にさっきの紙を渡す。

「語源が分かんねえから、解読して持って来い」

「承知でござる」

紙に目を向けながら去る万齋。

「よーっし、また子ちゃん、一緒に来なさい！！」

「えっ、私ツスか！？」

「そつよ！！ほらレッツゴー！！」

手を引いてダッシュで何処かへと連れ去る美代を脇目に見て、高杉はさっき聞いた話の内容を思い出していた。

万事屋の少年、少女を、白夜叉の手で殺させる。

第四章 事実（後書き）

オリキャラは美代って名前です。

基本元気っ子なんです、いざという時にはクール。ちよつとガキっばいです。

次回予告

徐々に銀時の心を蝕む悪夢。

そしてその小さな異変がやがて大きな異変に……。

次回も読んでください！

第五章 異変（前書き）

あんま深入りしておりません……。しかも中途半端。
読んでください！

第五章 異変

昨日と同様、布団から跳ね起きて、荒い呼吸を繰り返す。

二日間連続で悪夢を見たのは初めてだ。

ただただ人を斬っていて、屍を、舞うように右往左往しながら敵を斬る。

肉の契れる音。

血の滴る生暖かい感触。

骨の碎ける固さ。

人の命を奪う、重さ。

全てが鮮明かつリアルだった。

「あー……つたく……」

……最近、精神が不安定なんじゃないか。

認めたくないが、そうかもしれない。

「やだやだ。ほんとに辛気臭い」

自分に言い聞かせるように呟いてから、早々と着替えをすませ、部屋を出る。

「あ、おはようございます。銀さん」

「銀ちゃん起きるの遅すぎネ。ご飯先に食べちゃったアル」

「わりイ。眠かった」

「でももつり時ですからね。まったく、昨日の早起きが嘘のようですよ」

呆れ顔で支度をする新八。

まあ、あの早起きが悪夢のせいとは言えないが。

「はい、銀さん。さつさと食べちゃいましょう」

湯気のたつ茶碗を、俺に向かって差し出してくる。

ありがたくそれを受け取るうとして、茶碗ごしに新八と指が触れた。

瞬間、何かが俺の中を走り抜け、その直後には、新八の手を思い切りはらっていた。

ぱしんっ、と乾いた音が響き、間髪で茶碗を空中でキャッチする指と木が擦れる音だけが聞こえた。

「……あつ……」

「……銀さん、」

何も映しだされていない瞳が、恐い。

コイツらも、俺から離れていくんじゃないか。そう思った。

しかし、

「銀さん、ちょっと痛いですよ。冬なんですから、ひっぱたいても相当痛いんですからね」

「え……」

「銀ちゃんっ、寝不足アルか？育ち盛りは早寝早起きネ」

「……。神楽ちゃん、俺立派な大人」

「銀ちゃんの場合、頭が子供ヨ。精神年齢、中二のままアルネ」

「いーんですー。俺、心は少年なんでえ」

二人のおかげで、あの鬱な夢からも逃れられそうだ。

……。ありがとう。

第五章 異変（後書き）

次回予告の意味がない本編。
どういうことだ……。；。
反省……。

次回予告

悪夢の影響か、木刀さえ持てなくなった銀時の元に、一つの依頼が舞い込んでくる。
その依頼とは……？

次回も読んでください！

あと、感想もお願いします。

第六章 依頼（前書き）

結構長いかも・・・。

眠い・・・、眠れないんで書いてました。

誤字脱字がありそうなので、あつたら教えてください！

では、どうぞ。

第六章 依頼

心の傷は、深く深く染み付いて、なかなか無くならない。

それは、誰でも例外ではなく……。

「銀ちゃん、酢昆布買って来てヨ」

「……何で俺が」

「一番暇そうにしてたネ。当然アル」

「じゃ、今度からお前が暇そうにしてたら、ジャンプ買いにいかせんぞ」

「お断りヨ。天パ」

どっちだよ……。と愚痴りながらも、酢昆布代（100円）を片手に持ち、玄関に向かう。

ブーツを履くのに苦戦していると、後ろから神楽が俺を呼び止める。

「銀ちゃん、木刀忘れてるネ。いい歳して忘れ物なんて、結婚してから嫁さんが泣くアルヨ」

「へっ。銀さん結婚なんてしませんもんねーだ。心はまだ少年なんだよ。まだ中二のノリでいてーんだよ」

「とっとと受け取れこのダメンズが」

「神楽ちゃん？それ俺の空耳？」

可愛い顔で毒舌をぶっ放され、少々心を折りながらも、木刀に手を伸ばす。

だが、その目の前で、はたと腕が止まった。

腕が、握る事を許さない。動かない。
妙な悪寒だけが体を駆け巡る。

・・・まさか。

「・・・神楽、今日は木刀いらんわ」

「お、珍しいアルナ。何時も肌身離さず持ってたのに」
「ばあか。気分ってモンがあんだよ、気分ってモンが」

動揺しながらも、しかし平静を装いながら、ドアに手をかける。

ガラリと開くと、上等な着物を着た男が立っていた。

その後ろから、買い物から帰ってきた新八が、声をかける。

「あのお・・・、どちらさまですか？」

淡い栗色の長い髪の男は、にこりと笑って言った。

「依頼です」

「ターミナルで、天人達が困った事をするんですよ。何とかしてほしいんです」

「何とか、って・・・」

新八がちらりとこちらを見る。

そりゃ、昨日、春雨が命を狙ってるなんて言われれば、気になる事

この上ない。

第一、木刀さえ触れられなかったのに、天人退治なんて出来るのか？

「あの・・・すみませんが、この依頼は・・・」

「待て、新八」

片手を上げて制する。

「受ける。その依頼」

「ちよつ、本気ですか銀さん!!」

「そーネー!! 下手すれば、あのいかれた兄貴がいる春なんとかにやられるかもしれないアル!! そんなの絶対イヤヨ!!」

「へーきだつて。暗殺とかよりは、真つ向から行って潰した方が楽だろ」

小声のやりとりを、ニコニコしながら眺めるその男。

「受けていただけなんですネ?」

「ああ。で、何時行きゃあいい」

「今夜です」

・
・
・
!?

「今夜つ?!」

「はい。今夜は今夜です。それ以外の何物でもありません」

無理難題を平気でホイホイ言うコイツは鬼か!?

もしくは馬鹿か阿呆だな。脳みそが固い奴だろう。

「では、今夜、よろしくおねがいしますね」

言いたい事だけ言って、さっさと帰る男。

今夜……。今夜か……。

「俺いったん寝るわ」

低血圧、寝不足で負けましたというオチは辛い。

いったん夜まで寝る事にした。

「あ、分かりました。ゆっくり寝てくださいね」

新八の言葉を背に、部屋へと引き下がった。

元々、基本的に寝不足なので、あっという間に俺は眠りについた。

また戦場だ。

不思議と、人は居なくて、ただ物言わぬ屍が転がっているだけ。

血刀を眺め、空を見上げる。

と、不意に人の気配がした。

敵か。いや、

あの二人が。

無意識のうちに、腕を上げていく。

血に濡れた刀が、妖しく光った。

止める。斬るな、殺すな。

この二人だけは――。

紅が舞った。

目が覚めると、午後6時。

日の短い、冬の夜空が、町中に広がっていた。

「ったく……。こつも連続たアな……」

呟きながら、押し入れを開き、真剣を取り出す。

少し躊躇ったが、しっかりと握りしめる。

……じゃ、行ってくる。

何処に行ったのか、誰も居ない万事屋に、心の中で告げた。

第六章 依頼（後書き）

はい。中途半端な事この上ないです。
オリキャラの設定を少し。

美代

- ・左目に眼帯
- ・特別な能力持つてる（まだ秘密）
- ・高杉に言わせると、容姿が先生に似てるらしい

こんくらいです。

次回予告

ターミナルに乗り込んだ銀時の前には、春雨の集団が。
そして銀時は、大きな罪を犯す・・・。

が、その罪は次回をお楽しみに！！

感想、ぜひください！

次回も読んでくださいね！！

第七章 断罪（前書き）

やっとクライマックス的な感じですよ。

一番書きたかったんですけど駄文なんで読んでくださいな！

第七章 断罪

現在午後7時。

夜とはいっても、流石は眠らない町、かぶき町。

所々、明かりが漏れて、暗い夜を照らし出している。

これから向かうターミナルも、青白い光が瞬いている。

刀を握り締めて、ゆっくりと歩を進める。

「・・・さて」

警備員はもう既に、鞘入りの刀で叩き伏せ、中に入る。

・・・やけに静かだ。

と、横に気配を感じ、鞘から刀を抜いて、薙ぎ払うように斬りかかる。

確かな手ごたえの後、無数の殺気。

右、左、前、後。薄暗い中、一つずつ確実に避け、一人ずつ確実にしとめていった。

ただおかしいのが、真剣で斬っているはずなのに、血が出ない。

ガキンツ、と音をたてて、中ほどから刀が叩き折られる。

「 どうした。 白夜叉など、こんなものか？」

「・・・」

そうか。

数年前から、まったく使っていない。もちろん手入れなんてもつてのほか。

だから、斬れないから握ることができた。

でも 。

天人が落とした刀をしっかりと握って、声をあげながら斬りかかった。

返り血が、白と黒の俺につく。

悪寒はやがて、快感へと変わり、目の前が真っ赤に染まって・・・。

誰かが名前を呼んだ。

屍の山の中、笑いながら声を斬った。

瞬間、我に帰った。

「し・・・新八、か、ぐら・・・？」

夢の中の二人は、怯えた目でこちらを見ていた。

ただ、現実の二人は――、

笑っていた。

気が付いたら、胸の辺りに赤黒い傷をつくった新八と神楽が倒れているだけだった。

「し、新八っ。神楽あっ」

何度名前を呼んでも、薄い笑顔が変わる事はなく、ただただ奇妙な虚無感が体中を駆け巡った。

「違う」

これは――。

「俺はっ、」

あの夢は――。

「こんな……」

そうだ――。

「こんな事……っ」

これは現実だ。

悪夢の決定的な結末。それは夢の中ではなく、現実によって実現した。

残酷な現実に。

サヨナラ。

第七章 断罪（後書き）

ハッピーで終わりますよ！！
ご心配なく！！

次回予告

新八と神楽を『殺して』しまった銀時。
しかし、その不幸にも光が・・・？

次回も読んでくださいね！
感想もよろしくおねがいします。

第八章 希望（前書き）

展開的には、・・・微妙の一言に・・・。

しかも前回、なんか戦いから斬るまでが早いし、

修行いたしますー！！

のでぜひ読んでください！

第八章 希望

他の誰でもない。

俺が、殺したんだ――。

枯れてしまった涙。

家族を失くしても、涙の一粒さえ……。

真つ暗闇で、冷たい何かと、鋭い痛みが、俺を襲った。

痛みの方向を向くと、脇腹から、刀の切っ先が見えた。

それを中心に、じわじわと広がる血の染み。

返り血で滑る刀をぐつと握り、後ろの天人を斬った。

血刀を引き抜いて、残りの天人達も、確実に殺していった。

やがて、死体の山ができ、残るは一人。

長い髪を一つに纏めた、栗色の――。

……？

「ふうん。白夜叉に、今現在の家族とやらを殺させたのに、中々やりますね……。まあ、今回は退きますよ。こんなんじゃ、命がい

くつあつても足りませんし」「
あの依頼者だ。

此処へ誘い込む為の作戦……。

なのに気付かず、新八や神楽が止めるのも聞かず、

結果、二人を……。

「……の、野郎……っ」

「この依頼、受けてしまった貴方がいけないんですよ。私が知った
事では……」

言い終わる前に、横風ぎに斬りかかる。

それをひらりと避けて、俺を後ろへ突き飛ばす。

「さようなら。また会わない事を願って」

身体が宙に浮き、視界が反転する。

下には、海。

でも、もういい。

こんな世界で生きるのならば、この身を投げ出して地獄に墮ちる。

「……じめんなさい」

一粒、涙が空に消えた。

暗い。

もう、死んだかな？

痛い。苦しい。

此処は、何処？

「おいつ、起きろつたら。白夜叉!!」

高い声で、無理矢理覚醒させられる。

目を開けると、あの人に似た、髪の色をした少女の姿。

「ああ、やっと起きたのね。待ちくたびれたわよ」

「・・・誰」

「鬼兵隊、No.2の美代っっています。病み上がりだから大声禁止だって、ツラが」

「ツラじゃない、桂だ」

何処からともなく、桂が姿を現す。

病み上がり、という事は・・・。

「桂・・・、新八と、神楽は・・・？」

「あ、それには私が」

コホン、と咳ばらいし、美代が続ける。

「まあ、その二人は後ほどとして、まずアンタの状況から。春雨が命狙ってる、アレ本当。第なんとか師団の団長が、あんた怨んでるらしいからさー。」

ほい次。今此処、鬼兵隊の船ですが、此処に来るまでのいきさつ。

海に落ちたアンタをここまで引きずって来たのは私。感謝なさいな」

「・・・で、二人は？」

「銀時、残念だがあの二人は・・・」

残酷な結末だ。

絶対に、アイツらだけは護ると、心に誓ったのに・・・。

あの二人の前で流せなかった涙が、今になってとめどなく流れる。

ただ声を殺して、泣いていた。

「ったくもー、腹立つなあ」

美代のいらただし気な声で、はっと顔をあげる。

メモの切れ端に、何かを走り書きして、俺に渡してきた。

「此処に行きなさい」

紙には、『大江戸病院 306号室』と書いてあった。

「・・・！これ・・・」

「さあさあ、泣いてる暇あんなら行く！十秒以内に行く！！三秒で早く行けこの天パあっ！！！！」

俺はもう一回、紙に目を落とす。

脳がそれを認識する前に、体が動いていた。

そのまま、部屋を飛び出して、目的地へと全力疾走した。

「ツラ、あんた余計な事言いすぎ。私の努力無駄にしないで」

「ツラじゃない桂だ。俺も確認した。あれは間違いなく・・・」

「このへっばこ貧乏攘夷志士め。それしき、私がどうにかしないとでも思った？」

希望へ・・・。

第八章 希望（後書き）

最近になってふと思いました、

「あれ、ツラ出てなくね？」

坂本は出なくても、ツラはさすがに……。

という事で出しました。（ちなみに、最初の予定は高杉です）

（もっそい展開が書いてあります。次回、何書くかまだ知りたくない人は飛ばすか逃げて！！）

次回予告

大江戸病院にて、新八と神楽が生きていると知る銀時。

疲労困憊で倒れた銀時をよそに、美代が語るこの事件の真実とは・

・？

だんだん終わりも近いですね。

次の長編は、白夜又再臨篇とかいろいろを考えてます。

というかもう次……（汗）、今を考えろお。

感想、ぜひよろしくおねがいします！

第九章 真実（前書き）

長いです。文字数はねえです。
比べるとですが・・・。
では、どうぞ。

第九章 真実

「ところで、内臓を貫いた怪我なのに、あんなに走らせて大丈夫なのか？」

「ああ、平気。私も今から向かうわ。だって、感動のご対面を、私が汚すわけないでしょ？」

『・・・コイツなら、やりかねんな・・・』

前も見えないくらい、無我夢中で走った。

唯一の希望を胸に、ただただ走った。

傷口がじくじくと痛んで、息も荒く、嫌な咳もいくらか出た。

でも、止まる事はなく、全力全心をかけて、とにかく走った。

やがて目的地の病院に着き、306号室を探す。

しかし、力が入らない。

あがった息が纏わり付いて、呼吸ができない。

もう、無理だ。動けない・・・。

「・・・いや」

罪を犯したのは自分なんだ。

だから、それを確かめる必要がある。

責任がある。

一歩一歩、だが確実に進む。

「あ………つ、」

俺の瞳に映ったのは、306と書かれたプレート。

一息をついて、一気にドアを開けた。

「わっ、だ、誰ですか……」

ベットの縁に座りこんで、外を眺めていた人がこちらを向く。

一瞬、共に表情が固まった。それに被さるように、その横でうたた寝をしていた小さな人が目を覚まし、声をあげる。

「新ハイ、どーしたネ。真っ白な灰みたいなさせて」

「銀さん……銀さんっ!!」

「え!本当!?本当に銀ちゃんいるアルか?!」

……生きてた。俺のすぐ前で、明るく声を弾ませながら。

嬉しい気持ちか半面、あんな傷を負わせた自分への自責の念が頭を駆け巡った。

不意に力がはいらなくなり、膝から崩れ落ちるのを感じた。

「銀さん?ちょっと大丈夫ですか銀さん!!」

「ししし新八ツ！！ナスコール！！」

慌てふためく二人を見ると、申し訳なさで笑えてくる。逆に。

「……めん……ごめんなさい……」

「……」

「ごめんなさい……、本当に、ごめん……っ」

視界が黒い。

全てが闇に堕ちた。

「あー、やっぱり疲労困憊か……」

二人が振り返ると、ドアの陰に美代の姿。

新八が眉をひそめて、美代に言った。

「あの……、どちらさまですか？」

「はい、鬼兵隊No.2の美代というまーす。白夜叉にも聞いてほしい、大事な話だったんだけど……さすがに病人しよっぴく程落ちぶれてはいないから、アンタ達、後で言っただけでね」

「それはともかく、」と話を逸らし、本題に入る。

「アンタ達が何で生きてるのかっていう話をしにきたのよ。まあ簡単な仕組みよ」

「簡単？てゆうか、私達銀ちゃんに斬られて……。んん？あれ、その後は……」

「まあまあ、落ち着きなさいな。とりあえず、これ見なさい」

美代が取り出したのは、一本の刀と大根。

「・・・それ、大根じゃないといけないんですか？」

「何、生きた鶏の方がよかった？」

「いえ、結構です」

真顔で言う二人をよそに、すらりと刀を抜く。

何かと聞く前に、一線が走った。

ごとり、と音を立てて、真っ二つにされた大根が落ちる。

それを拾いあげて、にっこり笑う美代。

「・・・あの、それが？」

「それがつて何！？見てなさいって、面白いから」

ゆっくりと、大根の切り口を合わせる。

すると、ぴったりとくっついて、もう離れる事はなかった。

「細胞を潰さず、切断する事で、斬ってからも戻し合わせる事ができるの。で、それを可能にするため、私がこの刀を用意したの」

「お前が？」

「そーよ、私が。鬼兵隊が嗅ぎつけた情報。春雨が白夜叉を殺そうとしているってね」

「そして、」と笑顔の前に人差し指を立てて、続ける。

「情報の最後はね、こう書いてあったの」

『万事屋の少年、少女を、白夜叉の手で殺させる。』

「おそらく、春雨の連中は、素のままの白夜叉には勝てないと思っただから、まず大切な二人を自らの手で殺さして、精神を壊してから殺ろうって思ったのね……」

「けど、そう簡単にはいかないみたい。心の傷を抱えながらも、残りの敵を倒しちゃうくらいだし。で、海に落ちちゃうしもうびっくりよ」

笑い事どころではない事柄を、にこにこの笑顔で語る。

暗い顔を、よりいっそう暗くして、傍らで眠っている銀時に目をやる新八と神楽。

「ま、後はその白夜叉を怨んでる男を倒せば一件落着！以上！！質問は？」

「……鬼兵隊って事は、敵なんですか？」

「チツチツ、情報を入手したのは私達。そして、私が動くのを許可したのも隊長。まったく、自分の手で仕留めたいのか、ただのツンデレなのか」

「隊長って、高杉晋助アルカ？」

「そ。あ、大丈夫。私だって、嫌になったら何時でも裏切れるから。三回程やった」

「……」

何なんだこの女！！と顔に浮き出す二人。

それを無視して、「あ、そうそう」と思い出したような声をあげる美代。

「白夜叉、だいぶ悪夢に魘れてたわよ。私達の船に運んだ時も。・
・多分、最近ずっとそうだったんじゃないかしら？」

美代に言われて、初めて気付く。

ここ最近、様子がおかしかったのは、悪夢のせいなんじゃ。・・。

なのに自分達は、何も気付けなかった。

うなだれてる新八と神楽に美代は相変わらずの笑顔で言った。

「気にすん事ないわよ。白夜叉だって、自分のせいで二人が落ち込んでるなんて知ったら、多分もつと落ち込むわ」

その言葉で、いくらか気分を明るくする。

「でもよかった。銀さんが無事で」

「無事、なのかな？コレ」

銀時、新八、神楽と、三人で寄り添う姿は、まるで家族のよう。

それを、美代がさつきよりも温かな笑みを浮かべて、眺めていた。

……ところで……。

「鬼兵隊は隊長じゃなくて総督じゃないんですか？」

「だって、鬼兵隊じゃない。隊よ隊」

「……バカアル。筋金入りのバカネ……」

第九章 真実（後書き）

ちよい長いです（汗）。

最近、もう一つ長編を書いています。

ぜひそつちも読んでください！

例によって次回予告

目を覚ました銀時と、新八、神楽は、春雨の男を捜しに出る。
しかし、鬼兵隊から、あの紙の解読結果が来て・・・。

続きは次回！

感想、評価よろしくおねがいします！！

第十章 結果（前書き）

今日も部活行きませんでした（・・・）
行きづらいので行きませんでした。

友達に「適当に言い繕ろっ」といてー「by昨日

（メール）友達「夏バテって言うておいたよー」

（同）私「ありがとう！先生何て言うてた？」

友達「ああ・・・。みたいな」

先生「っ！！反応が薄い！！」

すみません。では、どうぞ。

第十章 結果

暗闇から光がさすようにして、ゆっくりと意識がはっきりしてくる。

最初に見えたのは白。そして鼻についた消毒液のような臭い。

とすると、此処は病院か？

でも、何で病院なんかに……。

たしか……。！！

がばつ、と跳び起きる。直後、脳がぐらりと揺れるような感覚に陥り、またベットに倒れこんだ。

「あつ、銀ちゃん！！」

「え？あ！よかったあ。三日間、ずっと眠りっぱなしで……。ただの疲労困憊らしいですから、心配は無いと思っんですけどね」

「ったく、もう無理したら、私シバくヨ」

「うん、逆に死ぬかもそれ」

視界に、新八と神楽の姿が飛び込んでくる。

じわりと涙で滲んでいくが、決して消える事はなかった。

「ありやりや？銀ちゃん、泣いてるアルカあ？」

「ち、ちがっ。これはただたんにな、目に睫毛が……」

「はいはい。うまいごまかしありがとうございます。ところで、三日前に美代さんが教えてくれた事なんですけどね……」

美代？と疑問があがるが、そこはあえて無視し、今は新八の話に集中する事にした。

一通り話し終わった後には、俺も驚愕で目を見開いた。

「まあ、何とかありますよ。何時もそうでしたし」

「だよ、銀ちゃん」

「・・・」

「だから銀さん、僕達にも戦わせてください」

「・・・だ、めだ」

やっと出た声は、思ってた他、掠れていた。

おそらく、一旦この二人を傷つけたトラウマであろう。

無表情な二人の視線が痛い。

べしっ。

鈍い痛みが頭にきて、数秒してから、この二人に叩かれた事が分かった。

「まったく。トラウマだどーのとか気にする必要ないですよ」

「私達は銀ちゃん信じてるネ。だから銀ちゃんも私達を信じてヨ」

「そうですね。ずるずると過去なんかに縛られるよりは、今を見る事の方がいいでしょ？」

.....

「・・・そうだな。俺もお前らを信じてみるか」

笑いながら呟くと、二人も笑顔を見せた。

温かな空気が流れた。

が、

バンツ！

「はるー！白夜又無事ー？あつ、起きてるじゃない！いやーよかつたよかつ・・・」

「・・・おおおいつ！！！！」

ドアを鳴らして入って来たのは、若い女だった。

・・・コイツが、美代？

「とうかさ、お前空気読めよ。なんか感動的な雰囲気になってたのにさ、お前が大声あげて入ってくるから一気にテンション下がったよマジで」

「いやー、ゴメンゴメン。万斎から解読結果が」

「何のよ？」

「いーからいーから。読みましょーよ」

「っーか読んでねーのかよ」

「私、重い空気を一人で抱くのやだ」

何とも我が儘な女だ。

というか、この・・・美代は、何でこんなに馴れ馴れしいというか、言ってしまうえば、俺の事を知っているのか？

そんな心配もよそに、嬉々と読み上げる美代。お気楽娘め。

「えーっと、大事な所かい摘まんで言うから心して聞くように。・

・江戸に時限爆弾。爆発は2月20日・・・明日じゃない」

「じ、時限爆弾っ?!ぎぎぎ銀さん、どうしましょう!?!」

「落ち着くネ新八っ!!まずはスナイパー捜すアル!!」

「お前が落ち着け!!っーか何でスナイパー?!」

「解体作業をそのお方に・・・」

「ビルじゃねーんだぞ!!近距離か。近距離でやるってか!?!爆発すんぞ、色んな意味で!!」

「うん、ちよつと落ち着いて。お願いだから」

冷たい声の主は、紙の上から片目で覗いている美代だった。

漆黒の瞳が、危険な色に輝いている。

「「「・・・すみませんでした」「」

まさか、美代にあんな恐ろしい目をする時があるとは、思ってもみなかったのです、半分腰がひけた。

「まあ、アンタ達ならなんとかなるでしょ。あ、アンタ達は時限爆弾なんて考えなくていいから。そこは私に任せなさい!」

「新八イ、爆弾処理班やとっぞー」

「人の話を聞きなさい。私に任せろ。何とかするから」

「「「すみませんでした」「」

たまたま、美代に対して頭があらなくなる万事屋三人であった。

第十章 結果（後書き）

ちよつと終わりに近づいてきましたね。

相変わらず微妙……。オリキャラが空気読めてない（汗）

次回予告

男の野望を止めようと、ターミナルに走る万事屋一同。

しかし、その途中で春雨の官軍が四方八方から襲ってきて……。

次回予告が最近めんどいです。

すみませんm（――）m

感想、評価よろしくおねがいします！

第十一章 信頼（前書き）

短いです。更新遅いし・・・。

というか宿題が・・・。誰か私の自由研究やってください（泣）
それはともかく、本文をどうぞ。

第十一章 信頼

「で……。俺らはどうすりゃいい？」

「そうね……。とりあえずターミナルに直行よ」

「でも……。此処からターミナルって遠くないですか？」

「ああ、そこなら心配いらないわよ」

自信満々に言う美代。

それを胡散臭げな目で見る俺ら万事屋三人。

「何？その顔」

「何？じゃねえよ。今までのお前の行動でもう信憑性が欠片もねえんだよ」

「行動？」

ハテナを浮かべる美代と読者の為に、今一度復習してみようと思います。

- 一、計画を聞いていても、止めもせずわざわざ新八ら二人を銀時（俺）に斬らせた。
- 二、怪我してるのに叩き起こした。
- 三、感動の再開をお気楽ムードでぶち壊した。
- 四、やっぱり感動シーンをぶち壊し。
- 五、やっぱりやっぱり感動（略）。

「……。という事で、俺はお前を信用できない」

「……。いや、今の説明何ですか？」

「此れはこの小説をこの話から見る人の為に、作者がくつつけた美

代のお気楽馬鹿特徴アル」

「シリアスな空気だったでしょ！！話を戻しましょう！！」

「病院の外に、アンタの原チャリ止めてあるから、それに乗って行きなさいな」

「ああ、分かった」

「銀さん、急ぎましょう！」

「銀ちゃん！」

二人の声を聞きながら、病室を抜け出す。

病院の外に全力疾走し、原チャリを見つける。

「美代！キーよこせ！」

「お、はい」

投げられたキーを急いで差込み、二人が乗るのを確認してから走らせる。

その後を、走って追いかけてくる美代。

「ちょっと！もうちょいゆっくり走ってくれない!？」

「ふざけてんのか腐れ女！！今の状況でよくそんな事言えるなボケ

！！！」

「こっちは走ってんのよ！空気読め天パ！！」

「テメーに言われたかねーや！！」

ほぼ叫びながら会話している俺達を見る痛い視線に耐えながら、夕ミナルに向かって原チャリを走らせる。

後200mといったところか。

人気のないこの道に、路地裏から、ざっと五十人程の天人が出てくる。

全員、刀や槍など、攻撃する気満々の群集を一瞥して、原チャリのスピードを落とす。

「美代」

「あん？何？」

「こいつらの相手してやれるか？」

「別にいいわよ」

美代に笑顔で言うと、彼女もニヤリと笑みを返してきた。

その笑顔を背に、原チャリのスピードをあげた。

するりと眼帯をはずす。その奥から、紫色の瞳が現れた。

「やれやれ、本当は槍だけで十分だと思うけど、まあ冥土の土産に、ね？」

ターミナル。

昼でも分かる青白い光を宿し、この江戸のシンボルという塔は聳え立っていた。

「新八、神楽・・・」

「僕達なら大丈夫ですよ」

「銀ちゃんに何かあったら、私達が必ず護るネ！だから、心配しないでヨ」

頼もしい笑顔に、一つ頷いて答え、中央部に向かって走った。

「ふふふ・・・来ましたか。やはり白夜又は大したものです・・・が。」

今度は死んでもらいますよ」

第十一章 信頼（後書き）

ほんつとに短い!!

宿題に追われて多分あんまり更新できません・・・。

早く頑張ります。はい。

次回予告は飛ばします。

では、感想、評価、よろしく願いします!!

第十二章 開戦（前書き）

眠い眠い眠い眠い眠い。

テストが近いですが、勉強なんかしたくないので書きました。
では、どうぞ。

第十二章 開戦

横についていく新八と神楽の気配を感じながら、とにかく走った。

「銀さん！これ、美代さんから渡してくれって！」

息も切れ切れに渡してきたのは、あの時、俺がこの二人を斬った時に使った刀。

「・・・っーか何でこれ？俺、これに嫌な思い出しかねーけど」

「これしか無いから我慢しろ。やり方によっちゃぁ、傷口くっつくから、ぶつぶつ言うなら斬り捨てる。以上！ですって」

「何なんだあの女ぁ！！？」

その場で頭を抱えなくなる衝動に耐え、刀を受け取る。

「あの、何でその刀、傷口が戻るんですか？」

「伸ばせるだけ叩き伸ばした刃だ。薄い刃が、細胞を潰す事なく斬ったんだろ」

「ダメンズ二人！くっっちゃべってる暇あったらとっとと走る！！」

神楽に一喝いれられ、黙って走った。

迷路のような階段を上がり、やがて見えてきた扉。

三人そろって扉を蹴散らし、中に入った。

「・・・おや、もう来ましたか。ずいぶんと早かったですね」

長髪が揺れる。

此処に天人はざっと五十人。

どうする。この二人を連れてきたからには、どうやっても……。

「あ、子供達も連れてきたんですか。じゃあまずその二人を始末してからの方が、私としても殺りがいがあるのですか？」

穏やかな物腰が、かえって俺の平常心を掻きむしる。

冷や汗で刀が滑る。

カシャンと部屋に音がこだました時、

「しっかりせんかいいい！このマダオがアア……！」

神楽に後頭部を殴られる。

涙目で後ろを向くと、仁王立ちの神楽が、がくがくと俺の肩を揺さぶってくる。

「おんめえそんな弱い人間だったか天パ！！こちらら心の準備くれーできとんじゃア……！」

「……」

とりあえず三歩下がる。

怒りの表情で立っている神楽に、敵でさえも冷や汗を流している。

（ちなみに、あの栗髪の奴も）

たいした威圧感。恐ろしい……。

「わーったらそつちはそつちであの栗頭倒してこんかいイイイ！！
！病室での憤りが今MAXなんじゃわかってんのか!？」

「はいはい、その怒りを全部敵にぶつけてください。多分勝てるよ」
なだめるように新八が言う。

そしてこちらを向き、彼特有の笑みをうかべる。

「銀さん、僕達は銀さんを信じてますから、銀さんも僕達を信じて
ください」

「……分かった。ピンチにはかけつけるからな」

「……あ？今の話聞いてたのか？」

「へ」と間の抜けた声と共に、ぐいと着物を引っ張られる。

ニコニコの黒笑顔だ。冷や汗タイム其？。(無論、敵はさつき以上の
冷や汗だ)

「てめーはてめーの戦いに集中すりゃいいんだよ。飯にも白夜又と
か呼ばれてたんだろーが。あんな奴、三分で倒して来い」

「い、いや新ば」

「返事ツツツ……!!」

「はっ、はいいい!!……!!」

まるで般若の怒り顔だ……。

「さて、所用はすみしましたか？」

にこやかな笑顔を向けてくる男。

不愉快な笑顔だ。小馬鹿にするようなその笑顔が。

「その二人を護りながら、いつまでもちますかね」

「心配いらねエよ。俺はコイツらを信じてる」

「ああ、これで心置きなく殺し合いが楽しめますね」

すらりと真剣を抜く。

相手も同じように、真剣を右手に持ち、構えていた。

「後ろの二人、殺しちゃいますよ？」

「殺せるモンなら殺してみる。俺が、そんな事絶対にさせねエ」

「強気ですね、気に入りましたよ」

戦いは、始まったばかり。

第十二章 開戦（後書き）

テストだー（泣）

後、戦いまでいれるよっ、て話です。

よーするに、あの口調の神楽が書きたかっただけです。

次回予告

ついに始まった戦いの時！

勝つのはどちらか！

ご期待！

次回予告がハイになる・・・。

でわ、

感想、評価、よろしくおねがいします！

第十三章 決着（前書き）

夜中、親に隠れて書いてます。

手短かに・・・。

本文をどうぞ！！

第十三章 決着

ひゅんひゅんと刀が空気を切る音が聞こえる。

男の攻撃を、全て間一髪で避けていく。

それほど、この男の剣が早いという事になる。

しかし、いつまでもこのまま避けられるわけでもない。

背後に壁が見えた瞬間、相手の一線を自分の刀で受け止める。

ぱつと火花が散り、渾身の力をこめてはらう。

男は一つ飛んで下がり、また俺達の間で距離ができた。

「ふふ、楽しいですか？白夜叉」

「楽しくねえよこんなもん。オメーこそ人殺して楽しいのか？」

「ええ、とつても」

歪んだ笑みが、俺の背中を撫でた。

「でも、普通の殺し合いじゃ、貴方は本気になってくれない。そう
ですね・・・あ」

そう声を漏らすと、袖から何か取り出す。

一つの瓶。

赤い液体がてらてらと光り、日光をつけて反射する。

「これはね、速効製の毒なんですよ。とはいっても、死なせてしまつては面白くないので、多少の自由がきかないようにするだけです。ちよつとでも掠ったらあの二人が死ぬ所を、その目で見るようになりますよ」

つまり、あの刃に触れずに倒せつてか。

あんな男にしては、卑怯な手を使うな、と思つたが、敵に依存しても仕方ない。

刀を構え直す。

ちらりと後ろを見ると、新八と神楽が戦っていた。

・・・大丈夫だ。俺はアイツらを信じている。

だから、俺は俺の戦いに集中しなくてはならない。

踏み込んで、一気に目の前まで行く。

横風ぎに払うと、影を残して姿が消えた。

「よそ見してる暇ですか？」

楽しそうな声。

反射的に左へ跳ぶと、今俺がいた場所に毒刃がおりた。

「ほらほら、ほやっとしない」

次から次へと刃が降ってくる。

眼下に迫った刀を受けた。

がちゃ、と音をたてて押される。

・・・やばい、このままじゃコイツに・・・。

冷や汗が頬を幾筋も流れる。

その時、

「神楽ちゃアアアアアん!!!」

新八の声。

後ろを見ると、固く目をつぶって次来る痛みを待っている神楽と、その神楽に向かって刀を振り上げる天人の姿が見えた。

受けていた刀を下ろし、相手の刀が少し俺を掠った。

体が重くなってくる。毒の効きが早い。

神楽に、刃が振り下ろされた。

「・・・？何、で、何で私・・・」

不安げな声が聞こえる。

空色の目が、大きく見開かれた。

「銀ちゃ・・・私を、庇って・・・」

背中についた一文字の刀傷は、たいしたことないと言いたかったが、どうもそうはいかないらしい。

それでも立ち上がり、戦う事くらいは訳なさそうだった。

「子供を庇うなんて、悪趣味な人ですね。その様子だと戦ってもあまり面白みがありませんし、最後の一撃でどうです？」

「俺もそっちの方が好都合だ」

あっちの笑みに負けないよう、俺も不敵な笑みを作る。

楽しそうに刀を構える男。

「言つとくがな、俺の、俺の大事な家族に手出した罪は重いぜ？」

「家族、ですか」

すうと目を細める。

そして、二人同時に斬りかかった。

.....。

一瞬、時間が止まったように思えた。

よく分からないが、後ろで男が倒れる音を聞いた。

無音。誰も何も発しない。

2メートル程離れた所に、新八と神楽がいた。

二人とも無傷だ。

「おい新八、神楽」

きよとんとした顔で寄ってくる。

その表情は、不安と、・・・俺にも分からない感情だ。

「帰るか」

「・・・そうですね」

「帰ろうネ」

そう、護りたかったのはこの笑顔。

ただ、この笑顔が見ればそれでいい。

三人並んで、出口へと向かうが、新八が不意に声をあげる。

「・・・あれ、これ何ですか？」

そこには段ボール箱くらいの四角い機械。

カウンタダウンをする文字板。

これはまさか……。

「……爆弾？」

俺が呟く必要もなかった。

すでに爆弾は、残り10分を切っている。

つーか美代はどうしたんだよ美代は!!

「白夜又達いるー？あ、いた。よかったよか……」

「おいテメー、何してた？」

「ドライバーとペンチ買いに」

日曜大工か?!

「はいはい待ってね、今解体するから」

『『『やっぱり今からなんだ!!!』』』

頭を抱える俺達をよそに、次々と分解する美代。

手際よさは認めるが、その精神をどうにかしてほしい。

「まあこれは生まれつきだしねえ。白夜又、ベタな質問だけど、赤青黄で好きな色は？」

「?、赤」

すると美代は、赤いコードをぶつりと切った。

爆弾は機能停止したが、気になったのは質問の意味だ。

「ベタな質問よ。コードの赤青黄、どれかを切りなさいってやつ」
「オメー、それ俺が青って答えたら爆発じゃねーか!!!」
「そーよ。よかったねー、直感に感謝」

・・・もうやだなコイツ。

とにもかくにも、

全ては今日終わった。

一件落着・・・かな？

第十三章 決着（後書き）

次回、最終回です！！

ちなみに新作は、ひぐらしの梨花が銀魂の世界に来ちゃう、しかも何か面倒臭い事に巻き込まれる、っていう話です。大まかなのは。

次回予告はいりませんかね・・・。

全てが終わり、銀時にとっての護りたいもの、家族とは・・・？

感想、評価よろしくおねがいします！！

終章 『ありがとう』（前書き）

テストなんて大っっ嫌いだああああ!!!

遂に最終回！長かったですねえ・・・え？上のは何かって？気にしない!!!

では、消え逝く者へ、最終回。
どうぞ！

終章 『ありがとう』

あの後、俺は三日三晩寝込んだ。

らしい。

なんせ記憶が無いから仕方ない。

ただ、目が覚めた時、俺の隣に新八と神楽がいてくれた事がうれしかった。

あの、頭を回転してみれば全ての元凶になったと思われる少女、美代は、相変わらず万事屋を訪れている。

その幼稚な頭で、この江戸を危険という名の檻に投げ込まない事を願うばかりだ。

え、高杉とツラは？

アイツらは何とかなる。平気だ、多分。

ぼーっと物思いにふける俺に、どんっと衝撃がくる。

っ！か、重い。だけど、あつたかな温もりだった。

「銀ちゃん、お帰りなさいっ！」

「お帰りなさい、銀さん」

にっこり笑う二人の意図が分からなかったが、照れを隠し、呟いた。

「・・・ただいま」

俺の家族は、晴れやかに笑った。

結局、俺が護りたかったのはこの笑顔、温かさ、そして幸せが求められる場所。

いつか手放しそうになっても、お前らがいてくれれば、俺は生きていける。

お前らがいてくれれば、俺はどこだって走っていける。

もう二度と離さぬよう、願って・・・。

消え逝く者へ、E n d

終章 『ありがとう』（後書き）

新作はひぐ銀です。

分かりづらっ、ひぐらし×銀魂です。

っーか梨花と羽入くらいしか出ませんが・・・。

では、感想、評価よろしくおねがいします!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9557m/>

消え逝く者へ

2010年11月4日22時31分発行